

辰野
隆

「坊っちゃん」管見

「坊っちゃん」管見

いささか大雑把な物の言いようではあるが、私見に拠れば、露伴・鷗外・漱石・潤一郎が近代日本の文芸苑における四天王だと思う。この四文豪については、いつか、腰を据えて研究もし、論評もして見たいと、かねて考えていた。しかし、四大家の全著作を改めて通読し、精読する余暇を未だ得ぬので——精読のないところに批評はあり得ない、印象批評すら成立し得ぬから——今は纏まった議論を吐く準備も勇気も持ち合せていない。ただ与えられた機会を幸い、漱石の『坊っちゃん』について寸

感を陳べるにとどめる。

最初に僕が『坊っちゃん』を読んだのは、一高時代であつた。たしか、「ホトトギス」の秋季増刊に載つたかと記憶している。その以前から既に大の漱石好きになつていた僕は、寄宿寮の二階で、みずから秋期休霊祭と称する祭日を作つて、学校を休んで——この新作を読み耽つたのであつた。坊っちゃんが中学の先生になつて初めて、任地に着くと、直ぐに東京が恋しくなり、少年時代から自分を孫のように可愛がってくれた婆やの清に手紙を書く。「きのう着いた、つまらん所だ。十五畳の座敷

に寝ている。宿屋へ茶代を五円やった。かみさんが頭を板の間にすりつけた。夕べは寝られなかった。清が笹飴を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は帰る。今日は学校へ行ってみんなにあだなをつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。いまに色々なことをかいてやる。左様ならさよう」この手紙を読んで、僕は「俺もこんな手紙を書いて見たいなあ」と思った。

二度目に「坊っちゃん」を読んだのは、猿之助が本郷座で「坊っちゃん」を演っていたころである、芝居の「坊

「つちちゃん」は観る気が起らなかつたが、芝居で演つてい
るといふ噂が機縁になつて芝居には行かずに、再びこの
小説を読んだのである。その時も、批評的な気持にはな
らずに、全く受動的な態度で、ただただ面白く芽出度く^{めでた}
読み了つた。

こんどが三度目である。依然として、面白く読んだが、
こんどは多少批判的に読んだ。

凡そ性格描写といふことは、どこにくにでも、小説道
の重大な要素の一つだろう。作家が性格を描いて見事に
成功した場合に、フランス人は往々、性格を描いて典型^{タイプ}

の域に達したと褒める。スタンダールのジュリヤン・ソレル（『赤と黒』）、フローベールのボヴァリイ夫人、バルザックのペエル・ゴリオやクウザン・ポンスなどがその好い例だろう。これに反して、性格を描いて類型タイプに堕したと謂ったら、それは明かに失敗の場合である。实例は各国の文学に数限りなく存在して而も殆ど悉く忘れられてしまった。そこで、タイプという言葉にも二様の意味が含まれていることが解る。典型と類型とである。

ところで、「坊っちゃん」は性格を描いた小説だろうか。そうではなからう。「坊っちゃん」は類型を目指し

てしかも類型を描き得た小説である。初めから作家が類型を描こう——あるいは類型を通して作家の理想を開陳しよう——と目論んでいるのだから、類型を描きえて、作家の意が読者に伝わればそれで「坊っちゃん」は成功と謂わなければならぬ。「坊っちゃん」が出た当時、「性格が描けておらんじやないか」などと見得を切ったとんまな批評家もいたように覚えているが、そういう手合がドオデーの『タルタラン』を読んだら、やっぱり痴呆こけの一つ覚えで「性格が描けておらん」と嘯くかも知れない。

「坊っちゃん」とは、その題からして類型に与えられた名である。「坊っちゃん」の中に出て来る人物は坊っちゃん始め、狸も赤シャツも山嵐ものだいごもうらなりも清も、悉く類型ならざるはない。しかもそれらの類型がいずれも潑刺として活躍している。それは、類型が作品の上ではあくまで類型として取扱われていながら、読者の胸裡には、類型に相当する生きた性格——人物と言ったほうがいいかも知れぬ——をまざまざと描かしむるからである。そこに天才と凡才との岐路が見える。

「坊っちゃん」ほど善玉と悪玉がはっきり岐れている小

説は漱石の作でも異例だろう。一方に坊っちゃん、山嵐派、他方に狸、赤シャツ党が官軍と賊軍のように対峙している。善派には、うらなりや清のような正直な弱者が影の如くつつましやかに控えているが、悪党にはのどいこや卑劣な田舎中学生が騒々しく加担している。各大学の争議と比べると、善悪はまことに一目瞭然である。機械的といえは機械的であるが、油が能く利いているので車が快く回転してゆくのである。

「坊っちゃん」における漱石の「悪」とは虚偽である。「嘘は泥坊のはじまり」という特に江戸っ子の愛好する

道徳である。宗教的な「罪」の意識はどこにも見当らない。狸の政治家的虚偽、赤シャツの感傷的虚偽、のだの幫間的虚偽。しかして善とは虚偽を打破する勇氣である。坊っちゃんの無鉄砲と啖呵たんかであり、山嵐の機略と腕力である。両人の対話。

——君はいつたいどこの産だ。

——おれは江戸っ子だ。

——うん江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた。

——君はどこだ。

— 僕は会津だ。

— 会津っぽか、強情な訳だ。

— 美しい顔をして人をおとしい陥れるようなハイカラ野郎

は延岡におらないから……と君は言ったらう。

— うん。

— ハイカラ野郎だけでは不足だよ。

— じゃ何と言うんだ。

— ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、

猫被りの、ねこつかぶ香具師のモモンガーの、おか岡っ引の、びきわんわ

ん鳴けば犬も同然な奴とでも言うがいゝ。

——おれには、そう舌は回らない。君は能弁だ、第一単語をたいへんたくさん知ってる。それで演説ができないのは不思議だ。

——……まったく御殿女中の生れ変りかなんかだぜ。ことによると、彼奴あいつのおやじは湯島のかげまかもしれな

い。
——湯島のかげまた何だ。

——なんでも男らしくないもんだろう……。

まったく坊っちゃんちゃんの語彙は豊富である。銀座が煉瓦で万世橋がめがね、官吏が官員さんでお抱車に乗って

た時代の東京弁を僕は久し振りで味わった。

この小説は虚偽の犠牲になった代表的善玉が悪玉に鉄拳と鶏卵の交叉射撃を発して溜飲をさげた拳句、虚偽の巢である田舎の小都市を引上げ、明るい東京に舞戻って梟けりがつく。

僕は「坊っちゃん」を類型の小説だと言ったが、それにつけても、比較したくなるのは、昨年、岸田国士君が訳したルナアルの「にんじん」である。「にんじん」は類型小説ではない。性格を描いて、典型の域には達しておらぬようだが、描かんと欲した性格は十分に描き得た

小説である。この二つの作は、まったく作家の態度を異にしている。ルナルが凝視しているのは「にんじん」——作者自身の少年時代——の心である。漱石の描いているのは「坊っちゃん」の目に映じた世相であった。「にんじん」は実の子でありながら、母親から疎うとんぜられ、^{しいた}虐げられた結果むしろ世間の孤児を羨むまでに^{ひね}振くれってしまった。

誰でも思いどおりに孤児にはなれない。

といった苦にがい言葉は「坊っちゃん」の口からは漏れる余地がない。にんじんは地方人で、坊っちゃんは都会人

だった。にんじんは凝結し、坊っちゃん蒸発する、とでもいうのか。

まったく、坊っちゃんはちやきちやきの江戸っ子に相違ない。坊っちゃんは江戸っ子であることを誇りとしている。江戸っ子は嘘をつかない。正直で、恬淡で、癩癩持ちで、損ばかりしている。地方人は狡猾で、卑怯で、けち臭く、陰険で、欲張りである。「坊っちゃん」のいたるところに、田舎漢いなかつぺいに対する憎悪と侮蔑が露骨に出て来る。坊っちゃんは述懐して、——それにしても世の中は不思議なものだ。虫の好かない奴が親切で、気の合っ

た友達が悪漢だなんて、人を馬鹿にしている。大方田舎だから東京の逆に行くんだろう。物騒なところだ。と。

坊っちゃんが田舎を呪う時には必ず東京で彼の帰るのを待っている婆やの清を想出すのである。清からの手紙にも、「田舎者は人がわるいそうだから、気を付けて苛ひどい目に遭あわないようにしろ」と書いてあったり、彼は自分が遭遇した不愉快な事件を思い出して、「こんな事を清に書いてやったら定めて驚くことだろう。箱根の向うだから化物ばけものが寄り合ってるんだというかもしれない」とも考えたり、いよいよ田舎がやりきれなくなると、「ど

うしても早く東京に帰って清と一所になるに限る。こんな田舎に居るのは墮落しに来ているようなものだ」と歎いている。けだし坊っちゃんに取っては、皺くちや婆さんの清は淨い都のサンボオルでも女神でもあった。ただし清のようなタイプは必しも東京の特産物でもない。僕で、外国にもこの種の型は必しも珍らしくはない。僕は「坊っちゃん」の清から「ユウジエニイ・グランデ」（バルザック）の中の老女ナノンに、アン・クウル・サンプル「まごころ」（フローベール）の中の老女フェリシテにまで想いを馳せた。この種の女性はいずれも裏面の無い聖女で、いつ死んでも、

手ぶらで安心して天国へ往ける人格者である。殊に、彼女等から受ける印象は、どこか、美しいしかも淋しい自然の眺めや、寂寞たる心境に訴えるある種の音楽に似ている。「坊っちゃん」の最後の数行もその例に漏れない。

「おれが東京に着いて下宿へも行かず、革鞆かばんを提さげたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来てくださったと涙をぽたくと落した。おれもあまり嬉うれしかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと言った。……死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生ごしやうだから清が死んだら、坊

つちちゃんのお寺へ埋めてください。お墓のなかで坊つちやんの来るのを楽しみに待っておりますと言った。だから清の墓は小日向の養源寺にある。」

この数行はフローベールの「まごころ」の最後の数行——老女フェリシテの死——と比較して読むと興味が深い。

坊つちちゃんが、江戸っ子を善、正と信じ、田舎漢を悪・邪と観ずる癖は、漱石の神経と密接な関係がある。凡そ潔癖にちか幾い正義の士が、傑れた芸術家であり、殊に異常に鋭い感覚を備え、時に彼が生まれながらの都会人で

あつた場合には、彼にとつては、都以外はすべて外国であり、敵国でもある。漱石はその生涯を通じて、強烈な正義感——むしろ悪に脅かされ、悪を憎む心——と病的に乱れた神経との交叉期には、幾度かこの敵国に悩まされたことがあつたらしい。四国において、ロンドンにおいて、地方色が無遠慮に侵した後の東京において。

かかる場合の敵国人は漱石の目にはことごとくスパイとして映るのである。これは恐らく、病理学的に観察し、診断せらるべき、強迫観念、被害妄想に等しいものであろう。しかし、これあるがために僕は漱石の天賦の聡明

から往々にして怪しく美しい火花が散るのを感じずる。漱石門下でも最も深く師に私淑した小宮豊隆氏はかつて僕に、「漱石の聡明には何処まで行っても割り切れぬ怪しき狂ひがある。それを美しいと思ふ」と語ったことがある。豊隆のいわゆる「割り切れぬ美しい狂ひ」と僕を感じずる「怪しく美しい火花」とが果して同じものであるか否かは詳かにせぬが、兎に角「或る狂ひ」が既に初期に属する呑気な「坊っちゃん」の裡にも感じられるのである。坊っちゃんが田舎中学生の悪戯から、布団の中の夥しいバツタの伏兵と戦う狂乱状態は、生涯漱石の脳裡

に、周期的に襲いにかかったかと思われる。

さもあらばあれ、「坊っちゃん」の文章は実に一気呵成で且つ暢達である。起句の「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」から結句の「だから清の墓は小日向の養源寺にある」まで、いささかのたるみも見せず、一瀉千里の勢いである。興に乗じて文を行^やる作家の風^{ふう}豊^{ほう}はあたかも満帆の順風に波濤を蹴る慨がある。惟うに「坊っちゃん」時代が、漱石の精神と肉体と希望と境遇とが適度の調和を得た、作家の楽しい一季節であったように思われる。

「だから清の墓は小日向の養源寺にある」

この結句は如何にも懐かしい。清は、下町に育って山の手に住む律義な忠貞な老女の好個の型であろう。清は既に類型を脱して典型に迫っている。

（「坊っちゃん鑑賞」 「文芸」 昭和九年三月号、改造社）

日本文学電子図書館

「漱石全集 第1巻」

著 者：夏目漱石

制作者：宮澤一郎

出版社：角川書店

昭和42年10月10日 8版発行

日本文学電子図書館